

## 日本赤十字九州国際看護大学学術情報リポジトリ

タイトル	看護学実習前演習に地域住民が模擬患者(simulated patient : SP)として参加することの意義に関する研究
著者	阿部オリエ, 小手川良江, 本田多美枝, 吉村恵, 堀井聡子, 柳井圭子
掲載誌	日本赤十字九州国際看護大学紀要, 11 : pp 49-58.
発行年	2012.12.28
版	publisher
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1127/00000220/">http://id.nii.ac.jp/1127/00000220/</a>

### <利用について>

- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社(学協会)などが有します。
- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。
- ・著作権に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。
- ・ただし、著作権者から著作権等管理事業者(学術著作権協会、日本著作出版権管理システムなど)に権利委託されているコンテンツの利用手続については各著作権等管理事業者に確認してください。

## 報告

### 看護学実習前演習に地域住民が模擬患者(simulated patient: SP) として参加することの意義に関する研究

阿部 オリエ<sup>1)</sup> 小手川 良江<sup>1)</sup> 本田 多美枝<sup>1)</sup> 吉村 恵<sup>2)</sup> 堀井聡子<sup>2)</sup> 柳井 圭子<sup>1)</sup>

本研究の目的は、実習前演習に地域住民がSPとして参加することにどのような意義があるのかを明らかにすることを目的とした。看護過程の展開実習前演習に模擬患者(simulated patient: 以下SPとする)として参加した10名にフォーカスグループインタビューを行い、質的帰納的研究を行った。その結果、SP体験の実態は2つのカテゴリー、10のサブカテゴリー、40のコードに分類された。具体的には、【SP参加型教育への授業改善への示唆】と【地域住民への健康教育の機会】との2つのカテゴリーと、『学生の反応より生じたSPの戸惑い・驚き』『学生の頑張り・勉強熱心・優しさに触れたことでの気持ちの変化』『学生とのやりとりから生じたSPとしての対応の在り方の変化』『SPが考える実習前演習のSP参加型教育の在り方』『学生のイメージ』『患者のイメージ』『看護師のイメージ』『看護職への期待』『役割意識の変化・向上』『健康観の向上』というサブカテゴリーが抽出された。

これらより、実習前演習にSPが参加することの意義は、SP参加型教育における授業改善への示唆と地域住民への健康教育の機会となることが明らかとなった。今後は、本研究を基に今後も調査を重ね、調査対象者数を増やし、信頼性・妥当性を高めていくことで、本学におけるSP参加型教育の指針を明確化することが、今後の課題である。

キーワード: 模擬患者 (SP)、 地域住民、 実習前演習、 フォーカスグループインタビュー

#### I 緒言

日本における医学教育に模擬患者(simulated patient: 以下SPとする)が紹介されたのは、1975年「医療と教育に関する国際セミナー」におけるH. S. Barrowsによる講演であった<sup>1)</sup>とされている。その後、日本の看護教育へも模擬患者を導入しようとする動きが広まり始めた。本田らは、日本の看護基礎教育において、SP参加型の教育を試みた研究論文(原著)の年次推移は、2002年に3件、2003年に9件、2004年に3件、2005年に7件、2006年に2件と報告している<sup>2)</sup>。また、看護基礎教育における演習へのSP活用については、コミュニケーション技術演習、看護基本技術、看護過程の展開、フィジカルアセスメントに分け摘している。このように、現在、日本の看護基礎教育において、SPがどのように活用されているかに関しては、徐々に解明されつつある状況である。しかし、同時に、SP参加型教育には、課題が多いことも指摘され

ている。その課題とは、SP導入自体、看護基礎教育においては歴史が浅いこと、本来、SPとは「訓練を受けた健康人」と定義されているが、看護基礎教育におけるSP導入は、必ずしも訓練を受けた一般市民がSPを担っている状況にはないこと<sup>5)</sup>、SPである教育ボランティアと、全ての学生が十分な時間関わることができないこと<sup>6)</sup>などが挙げられる。SPに焦点を当てた研究自体も少なく、淵本ら<sup>7)</sup>は模擬患者養成プログラムの検証を行っているが、SPの意見をデータとして取り扱った研究は、庄村ら<sup>8)</sup>の研究短報としての1件のみである。このように、看護基礎教育におけるSPに関する研究は、未開拓の部分が多いといえる。

本学では、2年次前期に看護過程の展開実習を実施している。本実習は、学生が病院で対象者を初めて受け持ち、看護過程を展開するという実習である。この実習前にSPを導入した演習を平成20年から実施している。SPは、地域のコミュニティを通して集まっていた地域住民の方々であり、状況を設定しSPを演じてもらう。SPを導入することで地域住民・学生それぞれに教育的効果があるのではないかと手ごたえを感

1) 日本赤十字九州国際看護大学

2) 前日本赤十字九州国際看護大学

じていたが、研究的な取り組みを行っておらず課題であった。そこで、SPと学生双方にどのような教育的効果があるのかを明らかにすることを目的に研究に取り組むことにした。

これをふまえ、本研究では対象をSPに限定し、実習前演習に地域住民がSPとして参加することにどのような意義があるのかを明らかにすることを目的とした。今後は、実習前演習に地域住民が参加することの意義や学生への教育的効果を明らかにすることにより、本学におけるSP参加型教育の指針を明確化する手がかりにしたいと考えている。

## II 研究方法

### 1. 研究デザイン

質的帰納的研究デザイン

### 2. 看護過程の展開実習前演習の方法

看護過程の展開実習前演習は、事例演習として、「左大腿骨頸部骨折、介達牽引中である70歳代の女性という設定で背部に汗をかいた」という事例を提供し、「看護援助について立案した援助計画を基に、看護実践場面のロールプレイを行う」ことを学生への課題とした。そのロールプレイの場面に患者役としてSPを導入し、学生はSPに対して背部清拭と寝衣交換を実施した。

### 3. 対象者

SP10名

### 4. データ収集方法

#### 1) 調査時期

平成23年7月28日、演習終了後に実施

#### 2) 方法

演習終了後、別室に集まっておいただき、研究の主旨を説明した。同意を得られた方のみ研究の対象としフォーカスグループインタビュー（以下インタビューとする）を実施した。インタビューガイド（表1）を作成し、それを基にインタビューを行った。時間は60分程度。インタビューは了承が得られたためボイスレコーダーに録音した。また、研究者が、演習中のSPや学生の反応を記録したものを補完的データとした。

表1 インタビューガイド

#### I. 対象者背景

1. 性別 (1. 女 2. 男)
2. 年齢 ( ) 歳
3. 模擬患者体験 ( ) 回

#### II. SPの体験について

1. 今回のSP体験の感想
2. 今回、SPを体験して気づいたこと
3. SPを体験することが自分にとってどのような意味があったか。(演習参加の動機とも関連づけて語ってもらう)
4. 今後このような機会があったら、SPとして参加したいか

### 5. データ分析方法

SPのインタビューデータから、逐語録を作成し、研究者間で内容分析を行い、コード化、サブカテゴリー化、カテゴリー化を行った。分析にあたっては、研究者間で繰り返し意見交換を行い、結果の信頼性・妥当性を確保できるようにした。

### 6. 倫理的配慮

口頭と文書にて研究の主旨を説明し、個人が特定されないように配慮を行い、同意を得られた場合のみ研究の対象とし同意書を得た。インタビュー時は同意が得られたためボイスレコーダーに録音した。研究辞退の申し出は、いつでも受け付けることを説明し、説明文に連絡先を記載し、また、第三者機関である本学研究倫理審査委員会に異議申し立てができることを記載した。

## III 結果

### 1. 対象者背景

演習に参加したSP11名のうち、研究協力に同意が得られた10名にインタビューを実施した。SPは全て女性であり、年齢層は50～70歳代に渡っていた。SPを以前本学で経験したことがある対象者が1名存在した。

### 2. SPへのインタビュー結果

#### 1) 生データをコード化する過程

今回の SP 体験の感想について自由に意見を求めたところ、SP より生き生きと感想が語られた。

SP 体験の感想と SP を体験して気づいたことに関するインタビューで語られた内容から、40 のコードが生成された (表2)。

表2 コード分類

	コード
1	学生のSPに対する関わり方への戸惑い
2	学生の看護師役人数に関する戸惑い
3	学生の説明不足や内容がはっきりしないことへの戸惑い
4	模擬という設定ではなく、SP本人の体調を気遣う学生に対する驚き
5	学生がプライバシーを配慮しすぎることへの驚き
6	学生の緊張への驚き
7	患者に関わることに慣れていない学生
8	学生の看護技術が至らなかった点に対する気づき
9	SPの臨機応変の対応により、シナリオ通りに行かずパニックに陥る学生
10	学生と直に接することで見えた学生の頑張り
11	学生の看護技術の素晴らしさ
12	勉強していたことを実践に生かしてほしいという願い
13	しっかり役割を担う観察役学生
14	対応の勉強
15	よく勉強している学生への感心
16	学生の笑顔、優しさへの感謝
17	本当の患者じゃないから許される学生の看護技術
18	気づいた時に伝えることの重要性
19	シナリオ通りにいかない現実を知ることの重要性
20	普段は友達同士、緊張感のない演習
21	SP側のセリフの設定
22	気軽な演習への参加
23	気持ち良いことをしてくれる演習
24	事前の説明不足
25	実名を使つてのSP設定
26	ハイヒール履いてキャッキャッという学生像
27	入院したらわがままになるという患者像
28	嫌味を言う患者
29	様々な経験とベテランナース
30	ストレスが多い看護師
31	どんなに嫌なことがあっても看護師さんにはニコニコしてほしいという願望
32	大変だけど立派な看護師という職業
33	わがまま言う患者も受け入れてほしいという願い
34	自己の介護体験の語り
35	役に立てることへの嬉しさ
36	今後もSPとしての参加希望
37	日頃の活動に活用できる看護教員の話
38	ベッド上生活への懸念
39	健康のありがたさへの再認識
40	注意しなくてはならない骨折

以下、生データ「 」とコード〈 〉に関しての一部を示す。

〈学生がプライバシーを配慮しすぎることへの驚き〉とは、「ものすごく気を遣って拭いてくれる」「バスタオルで覆ってくれたりする」「プライバシーを気にしてくれるのは分かるけど、背中ぐらい見えてもいいのよ」という SP の反応である。

〈学生の緊張への驚き〉とは、「学生は皆緊張してガチガチみたいだった」という言葉や「もう、ものすごく緊張しているから」という SP の反応を示している。

〈学生の看護技術が至らなかった点に対する気づき〉とは、「あんなに何回も袖を出したり入れたりしてはいけけない」、「もうちょっと簡単に (更衣が) できるようにならないといけけない」、「手すりを握ろうとしたら手すりがなかった」などの SP の反応である。

〈学生と直に接することで見えた学生の頑張り〉とは、「とても頑張っている。頑張っていることはよくわかった」などの SP の反応を示す。

〈よく勉強している学生への感心〉とは、「お湯の温度も患者にとっては何の温度というのが決まっているそうです」とか、「汚れたものは下、きれいなものは上という風に決まりがあるそうです」、「背中を拭くにしても、大学でいろいろ学んで実習に行くのがわかった。そんなにたくさん勉強していく姿がわかると、現場の看護師さんもきちんと教育を受けておられるのが分かるから安心な感じ」などの SP の反応を示す。

〈勉強していたことを実践に生かしてほしいという願い〉とは、「後のミーティングで教えていただいたから、もったいないと思った」という SP の反応である。

〈本当の患者じゃないから許される学生の看護技術〉とは、「今から実習に行くのだからわからなくて当たり前」、「今日なんか、どんなに失敗してもいいよ。本当の患者さんじゃないんだもん。いっぱい失敗して勉強しなさいねって言いました」。

〈気づいた時に伝えることの重要性〉とは、「こんな風に感じたっていうことをその時、学生さんに言ったら、もっと勉強になったかも」という言葉に代表される。

〈SP 側のセリフの設定〉とは、「私たちも、ああ言つて、こう言つてというセリフがもっとあってもいい」という SP の反応である。

〈事前の説明不足〉とは、「私は、上の下着を取らなきゃいけないって聞いてなかったから、恥ずかしがる年じゃないけれど、前もって説明してほしいから」「聞く

だけじゃ覚えてないから、説明書とかもらっておけばよい」などのSPの反応である。

〈ハイヒール履いてキャッキョウという学生像〉とは、「この学生さんにたまにバスで会うけれど、ハイヒール履いて、キャッキョウ言っている感じ」というSPの反応である。

〈入院したらわがままになるという患者像〉とは、「病気になる入院したらわがままになる」というSPの反応を示す。

〈様々な経験とベテランナース〉とは、「こんな風にいろいろもまれて、病院におけるベテランナースになっていくんだろうね」、「これから経験積んで、今の病院の看護師さんみたくなるんだろうから」とのSPの反応である。

〈大変だけど立派な看護師という職業〉とは、「今は大変だろうけど、看護師さんになったらいいもんね」「看護師になったら一人前よ。あとはルンルン」、「人の役に立つ立派な仕事だもんね」というSPの反応に代表される。

〈自己の介護体験の語り〉とは、「父とか叔父とかたくさん介護しました」「今回の話をもっと前にできていたら、自分で抱え込むのではなく、もっと楽に介護ができていたかも」というSPの反応である。

〈役に立てることへの嬉しさ〉とは、「気軽な気持ちで来てみたが、このことが学生さんの勉強の役に立てたら嬉しい」というSPの反応に代表される。

〈ベッド上生活への懸念〉とは、「本当に骨折して入院したら辛い。3~4週間もベッド上での生活なんて耐えられない」とのSPの反応である。

〈健康へのありがたさへの再認識〉とは、「とにかく健康第一と感じた」、「今、どこそこ悪いところもあるけれど、健康で普通に生活できることが一番だと感じた」「健康に注意した生活を心がけたい」といったSPの反応である。

## 2) コードからサブカテゴリー化に至る経緯

40のコードからサブカテゴリー化する際の内容分析についても、研究者間で意見交換を行いながら実施した。その結果を表3に示す。

表3 コードとサブカテゴリー分類

コード	サブカテゴリー
学生のSPに対する関わり方への戸惑い	学生の反応より生じたSPの戸惑い・驚き
学生の看護師役人数に関する戸惑い	
学生の説明不足や内容がはっきりしないことへの戸惑い	
模擬という設定ではなく、SP本人の体調を気遣う学生に対する驚き	
学生がプライバシーを配慮しすぎることへの驚き	
学生の緊張への驚き	
患者に関わることに慣れていない学生	
学生の看護技術が至らなかった点に対する気づき	
SPの臨機応変の対応により、シナリオ通りに行かずパニックに陥る学生	
学生と直に接することで見えた学生の頑張り	
学生の看護技術の素晴らしさ	
勉強していたことを実践に生かしてほしいという願い	
しっかり役割を担う観察役学生	
対応の勉強	
よく勉強している学生への感心	
学生の笑顔、優しさへの感謝	
本当の患者じゃないから許される学生の看護技術	学生とのやりとりから生じたSPとしての対応の在り方の変化
気づいた時に伝えることの重要性	
シナリオ通りにならない現実を知ることの重要性	
普段は友達同士、緊張感のない演習	
SP側のセリフの設定	SPが考える実習前演習のSP参加型教育の在り方
気軽な演習への参加	
気持ち良いことをしてくれる演習	
事前の説明不足	
実名を使つてのSP設定	学生のイメージ
ハイヒール履いてキャッキョウという学生像	
入院したらわがままになるという患者像	患者のイメージ
嫌味を言う患者	
様々な経験とベテランナース	看護師のイメージ
ストレスが多い看護師	
どんなに嫌なことがあっても看護師さんにはニコニコしてほしいという願望	看護職への期待
大変だけど立派な看護師という職業	
わがまま言う患者も受け入れてほしいという願い	
自己の介護体験の語り	役割意識の変化・向上
役に立てることへの嬉しさ	
今後もSPとしての参加希望	
日頃の活動に活用できる看護教員の話	健康観の向上
ベッド上生活への懸念	
健康へのありがたさへの再認識	
注意しなくてはならない骨折	

コード化に加え、サブカテゴリー化したものを『 』として以下に述べる。

〈学生のSPに関する関わり方への戸惑い〉〈学生の看護師役人数に関する戸惑い〉〈学生の説明不足や内容がはっきりしないことへの戸惑い〉〈模擬という設定ではなく、SP本人の体調を気遣う学生に対する驚き〉〈学生がプライバシーを配慮しすぎることへの驚き〉〈学生の緊張への驚き〉〈患者に関わることに慣れていない学生〉〈学生の看護技術が至らなかった点に対する気づき〉〈SPの臨機応変の対応により、シナリオ通りに行かずパニックに陥る学生〉というコードは、『学生の反応より生じたSPの戸惑い・驚き』としてサブカテゴリー化した。

〈学生と直に接することで見えた学生の頑張り〉〈学生の看護技術の素晴らしさ〉〈勉強していたことを実践に生かしてほしいという願い〉〈しっかり役割を担う観察役学生〉〈対応の勉強〉〈よく勉強している学生への感心〉〈学生の笑顔、優しさへの感謝〉というコードは、『学生の頑張り・勉強熱心・優しさに触れたことでの気持ちの変化』というサブカテゴリーを設定した。

〈本当の患者じゃないから許される学生の看護技術〉〈気づいた時に伝えることの重要性〉〈シナリオ通りにいかない現実を知ることの重要性〉〈普段は友達同士、緊張感のない演習〉というコードは、『学生とのやりとりから生じたSPとしての対応の在り方の変化』としてサブカテゴリーを設定した。

また、〈SP側のセリフの設定〉〈気軽な演習への参加〉〈気持ち良いことをしてくれる演習〉〈事前の説明不足〉〈実名を使つてのSP設定〉というコードからは、『SPが考える実習前演習のSP参加型教育の在り方』というサブカテゴリーが生成された。

〈ハイヒール履いてキャッキョという学生像〉というコードからは、本学の『学生のイメージ』というサブカテゴリーが抽出できた。

〈入院したらわがままになるという患者像〉〈嫌味を言う患者〉といった『患者のイメージ』や、〈様々な経験とベテランナース〉〈ストレスが多い看護師〉というコードからは、『看護師のイメージ』というサブカテゴリーが抽出された。

〈どんなに嫌なことがあっても看護師さんにはニコニコしてほしいという願望〉〈大変だけど立派な看護師という職業〉〈わがまま言う患者も受け入れてほしいという願い〉というコードは、『看護職への期待』としてサブカテゴリー化した。

〈自己の介護体験の語り〉〈役に立てることへの嬉しさ〉〈今後もSPとしての参加希望〉〈日頃の活動に活用できる看護教員の話〉といったコードからは、『役割意識の変化・向上』というサブカテゴリーが抽出された。

〈ベッド上生活への懸念〉〈健康のありがたさへの再認識〉〈注意しなくてはならない骨折〉というコードからは、『健康観の向上』というサブカテゴリーが抽出された。

このように、40のコードから10のサブカテゴリーが抽出されるに至った。

### 3) サブカテゴリーからカテゴリー化に至る経緯

10のサブカテゴリーからカテゴリーを抽出した結果を表4に示す。

カテゴリー化したものは、【 』で表すこととする。『学生の反応より生じたSPの戸惑い・驚き』、『学生の頑張り・勉強熱心・優しさに触れたことでの気持ちの変化』とは、SPが学生の演習状況を見ての語りであり、学生の反応や、看護技術教育の改善点などを示す内容となっていた。『学生とのやりとりから生じたSPとしての対応の在り方の変化』、『SPが考える実習前演習のSP参加型教育の在り方』というサブカテゴリーには、SPが学生とやりとりすることによって、学生への教育効果を高めるにはどうしたらよかったかといった内容が含まれていた。また、SP自身が参加して気づいたSPを演じるにあたっての感想の中には、SPになったからこそ気づき得た内容が多く、SPをもっとこうした方がよかった、SPになった利点などが含まれていた。『学生のイメージ』、『患者のイメージ』、『看護師のイメージ』、『看護職への期待』というサブカテゴリーは、現在の学生イメージと将来の看護師イメージを照らし合わせ、このような看護教育を受けることにより、現場の看護師のようなベテランになっていくであろう姿をSP自身が想像し、そうなるためには、現在の教育が重要だという意見が多く含まれていた。また、入院した後の患者のイメージからは、わがまま言っても受け入れてくれるような看護師になってほしいとの学生への願いや、現在の現場の看護師へも、ニコニコしてほしうといった願いが含まれた内容となっており、学生も含めた看護職への態度面に関する要望が多く語られた。それらを統合すると、全て、どのように授業を改善したらよいかを検討する指針となる内容であったため、【SP参加型教育への授業改善への示唆】としてカテゴリー化した。

『役割意識の変化・向上』、『健康観の向上』というサブカテゴリーからは、自己の介護体験を語ることで、体験の意味づけを強化する機会になった。また、患者を演じることにより、現在の自分自身の健康に感謝したり、骨折しないよう注意を払う機会になったりと、健康をより強く意識する機会となっていた。よって、【地域住民への健康教育の機会】というカテゴリーを抽出した。

表4 サブカテゴリーとカテゴリー分類

サブカテゴリー	カテゴリー
学生の反応より生じたSPの戸惑い・驚き	SP参加型教育における授業改善への示唆
学生の頑張り・勉強熱心・優しさに触れたことでの気持ちの変化	
学生とのやりとりから生じたSPとしての対応の在り方の変化	
SPが考える実習前演習のSP参加型教育の在り方	
学生のイメージ	
患者のイメージ	
看護師のイメージ	
看護職への期待	
役割意識の変化・向上	地域住民への健康教育の機会
健康観の向上	

#### 4) SPより語られた内容の経時的変化

さらに、グループインタビューを通してのSPの語りには、経時的な変化が見られた。これらの語りを経時的にまとめたものを図1に示す。

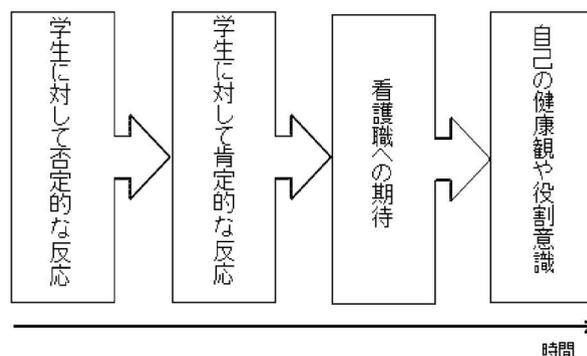


図1 SPの語りの経時的変化

初めは、学生の演習に対して、「いきなり血圧を測ることから始まった」、「説明が足りない」、「あんなに何回も袖を出したり入れたりしてはいけない」、「学生は皆緊張してガチガチみたいだった」というように、『学生の反応より生じたSPの戸惑い・驚き』が述べられた。うまくいかなかった点や説明不足な点、緊張している点など、学生に対して否定的な感想が多く語られた。

次第に、実習を前にして、学生の不慣れな点に関して「慣れていないんだもんね」、「何でも勉強だからね」、「(看護技術が)できないことが当たり前」といったように、学生の状況を理解した言葉が聞かれるようになった。また、「一生懸命で優しいのが何より」、「学生のうちに、こんなに勉強してるのがわかると安心」「とっても気持ち良かった」「それぞれ自分でも反省するし、チェックする人が厳しい目でいろいろ見てたり、よく勉強している」というような、『学生の頑張り・勉強熱心・優しさに触れたことでの気持ちの変化』というサブカテゴリーに表されるように、学生の状況を肯定的に捉えた感想へと変化した。

これらの語りから、「この学生さんにたまにバスで会うけれど、ハイヒール履いて、キャッキャッ言っている感じ」という普段の『学生のイメージ』から、「これから経験積んで、今の、病院の看護師さんみたくなるんだろうから」というSPの看護職への理想が語られた。それらは、看護職への期待を込めた内容であった。

その後、〈自己の介護体験〉が語られたり、「気軽に気持ちで来てみたが、このことが学生さんの勉強の役に立てたら嬉しい」というような、SP自身の『役割意識の変化・向上』についての言葉が聞かれ始めた。

インタビュー終盤には、「とにかく健康第一と感じ

た」、「今、どこそこ悪いところもあるけれど、健康で普通に生活できることが一番だと感じた」、「健康に注意した生活を心がけたい」といったように、健康に関する発言が多く聞かれた。

このような SP の反応は、[学生に対して否定的な反応]→[学生に対して肯定的な反応]→[看護職への期待]→[自己の健康観や役割意識]として表され、経時的な変化として示すことができた。

#### IV 考察

本研究は、実習前演習に地域住民が SP として参加することにどのような意義があるのかを明らかにすることを目的とした。

結果では、40 のコード、10 のサブカテゴリー、2 つのカテゴリーを抽出するに至った。まず、サブカテゴリーの特徴について述べる。

演習の感想について、SP にインタビューしたところ、次々と意見が述べられた。学生の反応から気づいたことが感想として述べられた。『学生の反応より生じた SP の戸惑い・驚き』というサブカテゴリーは、学生の看護技術の未熟さや、とても緊張している学生の姿を目の前にした SP の反応であった。どちらかといえば、学生のできないところに気づいた反応が多く聞かれた。

『学生の頑張り・勉強熱心・優しさに触れたことでの気持ちの変化』というサブカテゴリーは、学生がよく勉強していること、観察役の学生がしっかり役割を担っていたことなど、学生の様子を肯定的に捉えた反応が多いといえる。

このように、『学生の反応より生じた SP の戸惑い・驚き』と『学生の頑張り・勉強熱心・優しさに触れたことでの気持ちの変化』というサブカテゴリーは、相反する意味合いを含んでいた。SP は、様々な角度から学生の演習状況を捉えており、SP の演習に対する関心の深さがうかがえた。

SP 自身についての感想も多く聞かれた。演習時のロールプレイやカンファレンスなどで、学生とやりとりをすることにより、SP 自身、「こんな風を感じたってことを学生さんに言っといたら、もっと勉強になったかも」などの意見が出るようになった。同時に、SP と学生とのやりとりで、学生への教育的関わりに関する意見も出され、『学生とのやりとりから生じた SP としての対応の在り方の変化』というサブカテゴリーを設定するに至った。

また、SP を演じるにあたっての要望や改善点などが

述べられ、『SP が考える実習前演習の SP 参加型教育の在り方』としてサブカテゴリーが抽出された。これらの反応からは、教員が模擬の設定に関して SP にどのように依頼した方がよいかの方向性が示された。

SP から『学生のイメージ』、『患者のイメージ』、『看護師のイメージ』が述べられたが、これは、自己の経験、周囲の人からの伝聞、身近な人の入院や自己の介護体験から述べられた言葉であった。SP を演じた地域住民にとって、看護職とは病院に勤務する看護師のイメージであり、患者とは、病院に入院している患者のイメージであった。

『看護職への期待』とは、看護師や、将来看護師になるであろう学生に期待する願いであり、入院して患者になったら、看護師に優しく接してほしい、わがままになったり、愚痴を言ったりするであろう自分を受け入れてほしいといった内容であった。優しく、ニコニコした看護師というような、看護職への態度面に関する希望が多く聞かれた。

これら 8 つのサブカテゴリーは、授業改善につながる意見と考えられ、【SP 参加型教育への授業改善への示唆】というカテゴリーを抽出するに至った。

インタビュー終盤になると、自己の介護体験を振り返り、当時の辛さを思い出し涙する SP もおり、「今回の話をもっと前にできていたら、自分で抱え込むのではなく、もっと楽に介護ができていたかも」という反応があった。介護をしていた当時のことを振り返り、語るという経験が、自己の役割への変化をもたらすきっかけとなり、『役割意識の変化』というサブカテゴリーが抽出された。一方、高齢者スーツ着用などによる高齢者の疑似体験を経験したことのある SP からは、「気軽な気持ちで来てみたが、このことが学生さんの勉強の役に立てたら嬉しい」という『役割意識の向上』をもたらした。学生の演習に SP として参加することで、今までとは違う自分の役割を認識し意欲を向上させるきっかけとなったことが明らかになった。

SP 体験の意味づけに関しては、「とにかく健康第一と感じた」、「今、どこそこ悪いところもあるけれど、健康で普通に生活できることが一番だと感じた」などの発言が聞かれた。骨折という模擬の患者を経験し、「本当に骨折して入院したら辛い、3~4 週間もベッド上での生活なんて耐えられない」、「健康に注意した生活を心がけたい」などの反応があり、『健康観の向上』というサブカテゴリーが生成された。

今回の SP 体験が、自己の健康に着目したり、自己の

生活を振り返るきっかけとなったことは事実であり、SPとして演習に参加することが、【地域住民への健康教育の機会】というカテゴリーとして抽出されるに至った。

次に、SPへのインタビューを通して、SPの語りを経時的に見た変化について述べる。

SPへのインタビューでは、学生の演習時の様子が述べられ、初めはあんなこともできない、こんなことをしていたと否定的な感想が多く述べられていたが、次第にその状況を、「今から実習に行くのだからわからなくて当たり前」とか、「背中を拭くにしても、大学でいろいろ学んで実習に行くのがわかった。そんなにたくさん勉強していく姿がわかると、現場の看護師さんもきちんと教育を受けておられるのが分かるから安心な感じ」などの肯定的な感想へと変化していった。

更に、現在の『学生のイメージ』、『患者のイメージ』、『看護師のイメージ』などが語られ、看護師や、将来看護師になるであろう学生に期待する願いが聞かれ始め、『看護職への期待』として感想が述べられた。

その後、SPからは、自己に着目した感想が述べられ、自己の健康観や役割意識についての感想へと変化し、これらは、【地域住民への健康教育の機会】としてのカテゴリー化につながった。

このように、SPの語りには、時間の流れに沿って、[学生に対しての否定的な反応]→[学生に対しての肯定的な反応]→[看護職への期待]→[自己の健康観や役割意識]といった内容に変化していることが明らかになった。経時的変化をとらえることで、最終的にはSP自身がSP体験を肯定的に捉えていることが明らかになった。

庄村ら<sup>9)</sup>は、事例演習にSPとして参加する地域住民の経験として4つの分類を示した。その分類によると、1. 自分自身の励みや成長、2. SPとしての困惑、3. SP教育の改善のための取り組み、4. 看護学生への願いに分けられている。今回、筆者らのSP体験の実態を明らかにするためにインタビューを実施したところ、【SP参加型教育への授業改善への示唆】と【地域住民への健康教育の機会】というカテゴリーが抽出された。先行研究は、分析の詳細が明らかにされていないため、単純に比較検討はできないと考えるが、本研究の調査対象者は、SPとしての困惑よりも、地域住民がSPとして大学の授業科目である演習に関わろうという意欲を持っていること、その役割を肯定的に感じていることが明らかとなった。

## V 研究の限界と今後の課題

本研究は、SP体験の実態を明らかにすることを目的とした研究であるが、対象者数が10名と少なく、信頼性・妥当性の検証が不十分と考える。本研究を基に今後も調査を重ね、調査対象者数を増やし、信頼性・妥当性を高めていくことで、本学におけるSP参加型教育の指針を明確化することが、今後の課題である。

## VI 結論

SPへのインタビューを行った結果、SP体験の実態は2つのカテゴリー、10のサブカテゴリー、40のコードに分類された。

実習前演習に地域住民がSPとして参加することの意義は、SP参加型教育における授業改善への示唆と地域住民への健康教育の機会となることが明らかとなった。

## VII 謝辞

ご多忙の折、快く研究にご協力いただいた、SPの皆様にご感謝申し上げます。

なお、本研究は平成23年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究費助成を受け実施した。

受付	2012. 8. 15
採用	2012. 12. 19

## 文献

- 1) 大滝純司：模擬患者を使った面接法：日本での試み、日本の看護教育への模擬患者導入の意義。看護展望、18(8)：897-899、1993。
- 2) 本田多美枝他：看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察 - 教育の特徴および効果、課題に着目して -。日本赤十字九州国際看護大学 IRR、7：68、2009。
- 3) 前掲 2) 68-69。
- 4) 井上京子他：当大学における模擬患者参加型授業の実態。山形保健医療研究、15:41、2012。
- 5) 前掲 2) 73-74。
- 6) 江川幸二他：看護大学における地域住民ボランティアを導入した授業の評価 - 学生の感想・意見から -。神戸市看護大学紀要、15：57-66、2011。
- 7) 淵本雅昭他：看護基礎教育における模擬患者養成プログラムの実際とその検証。札幌市立大学研究論文集、6(1)：3-10、2012。

- 8) 庄村雅子他：事例演習に模擬患者（SP）として参加する地域住民の経験．東海大学健康科学部紀要、16：123-124、2010.
- 9) 前掲 8) 124.

## **Significance of community residents' participation as simulated patients in laboratory practicum of pre-clinical nursing students**

Orie ABE, OR.N., E.M.S.<sup>1)</sup> Yoshie KOTEGAWA, R.N., M.N.<sup>1)</sup> Tamie HONDA, R.N., PhD<sup>1)</sup> Megumi YOSHIMURA, R.N., M.N.<sup>1)</sup> Satoko HORII, R.N., P.H.N., M.S.N.<sup>2)</sup> Keiko YANAI, R.N., PhD<sup>1)</sup>

The present study aimed to clarify the significance of community residents' participation as simulated patients (SP) in laboratory practicum of pre-clinical nursing students. Focus group interviews were conducted with 10 community residents who participated as SPs in the nursing process development pre-clinical practicum training. The obtained data were qualitatively and inductively analyzed. SP experiences were classified into 2 categories and 10 subcategories; categories were "suggestions for SP participation-based education class improvement" and "opportunities to provide health education and support to community residents; subcategories were "SP's confusion embarrassment/surprise that resulted from the students' reactions", "change of feelings after observing students' perseverance/study earnest and gentleness", "change of the idea/concept/role? of an SP that resulted from interaction with the students", "ideal way of SP participation-based education in pre-clinical training from the point of view of SPs", "images of nursing students", "images of patients", "images of nurses", "expectation of nursing profession", "change/improvement of the role awareness", and "improvement of the idea of health".

It became clear that SP participation in laboratory practicum of pre-clinical nursing students was significant because it was a source of suggestions for SP participation-based education class improvement and an opportunity to provide community residents with health education and support. Based on the present study, we plan to conduct further research with a larger sample size to improve reliability and appropriateness that contribute to draw up the guidelines for SP participation-based education.

**Keywords: simulated patient, community resident, laboratory practicum, pre-clinical practicum, focus group interview**

---

1) The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

2) The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing (until 2011)